經濟論叢

第八十七巻　第四號

経済学の現実的出発点について……吉　村　達　次　1

ダニエル・デフォウの簿記論……高　寺　貞　男　22

ツィーシャンクの国家独占
資本主義論について……池　上　　惇　38

イギリス革命の農業・土地問題
解決とその歴史的意義……尾　崎　芳　治　54

昭和三十六年四月

京都大學經濟學會

第八十七巻　二八八　第四号　二二

ダニエル・デフォウの簿記論

高寺貞男

『商品生産によって生産者と消費者が空間的に分離したことや、それとともに発展した支払い関係や信用関係によって、商人階級はますます大きな意義をもつようになった。かれらの資金業務や信用業務に相応した一定の形態の簿記を発展させることと、当時すでに錯綜しかつ複雑となっていた取引業務の遂行にあたって一定の経験を書物に書きおろすことが、商人階級にとって必要になった。』

—Günter Schmidt, *Der Charakter der kapitalistischen Betriebswirtschaftslehre und der sozialen Betriebspolitik*, Berlin 1957. S. 9.—

一

われわれが子供の時から親しんできた『ロビンソン・クルーソー』をはじめ多くの小説を書いたダニエル・デフォウ Daniel Defoe (*1660–1731*) は一般にイギリス小説とイギリス・ジャーナリズムの先駆者として知られているが、彼はまたイギリス経営学の先駆者でもあった。彼は晩年になってから、若い時の「商人とかなりの規模の製造業者[1]」としての経験からえた「商業事情についての広範な知識[2]」をもとにして、若い商人のために商人としての心得と商業実務の手引を手紙の形式で書いている。今日の「経営学入門」とでもいうべきこの『完全なイギリス商

人』(*The Complete English Tradesman* in familiar Letters: Directing him in all the several Parts and Progressions of Trade, London, 1st ed. 1725, 2nd. ed. 1727.) は多くの経済史家や経営史家によって種々な角度から研究されているが、イギリス簿記史の研究書にふしてある文献目録には必ずといってよいほど右の『完全なイギリス商人』が収録されている[3]ことからも推察できるように、それは簿記史の研究にとっても貴重な文献である。

もちろん、この書物は簿記の解説だけを目ざしたものではない。この書物の中で簿記に言及した個所は第一巻の第一の手紙「商人の徒弟期間中における諸準備について」の一部(一三―一五頁)、第二〇の手紙「商人の記帳と決算(casting up shop)について」(二六六―二八六頁)、第一巻への追補の第三章「簿記について――記帳の方法と仕方についての商人のための若干の指示」(三一―一四六頁)と第四章「火災にそなえて控え元帳またはポケット元帳を記入しておくことについて」(一四六―一四八頁)であり、全体の紙数(第一巻五三〇頁、第二巻四八〇頁、計一〇一〇頁)の約一割四分(一四二頁)をしめるにすぎない。しかし、この簿記に言及した個所は当時の簿記書にはあまりみられない、二つのすぐれた特徴をもっている。第一の特徴は、前半部分において商人に簿記の重要性を説くにあたって、簿記が必要不可欠のものとなった歴史的・現実的理由を明らかにしている点である。第二の特徴は、当時の簿記書の多くが先進的経験をとり入れて「テキストで〔解説された〕方法は実際に用いられた方法よりもより組織的かつ包括的であった[4]」といわれているのにくらべて、簿記方法を解説した後半部分では当時イギリス商業で一般に用いられた簿記実務(部分的にはそうでなかったものも含まれているが)にしたがっている点である。

そこで、本稿では、デフォウが彼の『完全なイギリス商人』(一七二七年版)第一巻の中で簿記に言及した個所を(同じことをくりかえしのべた重複個所はできるだけさけて)「デフォウの簿記論」として紹介して、十八世紀初頭のイ

ギリス商業簿記の実践形態とそれを規定した要因を明かにし、それによって簿記一般の実践形態の展開を規定する歴史的要因をさぐる手がかりをえたいと考えている。

(1) G. D. H. Cole, *Persons & Periods*, London 1938, p. 23.
デフォウの「商人・製造業者」としての経歴はおおよそつぎのとおりである。
活動的な国教反対者であったロンドンの肉屋の息子として一六六〇年に生れたフォウ(「デ」は彼自身が付加えたものである)は、牧師にされるはずであったが、自分がそれに向かないことをさとり(彼は生涯誠実な国教反対者であったが)、メリヤス製品とブドウ酒を取扱う(前者を輸出し、後者を輸入する)商人の徒弟となった。そして、一六八五年にロンドンでメリヤス製品問屋をひらき、一六八八年にシティの同業組合員となり、一六九二年に(一部は彼自身の手違い、他の一部は戦争による損失によって)破産した。一六九四年に会計専門家(アカウンタント)としてガラス税 Glass Duty の委員に任命され、ガラス税が一六九九年に廃止されるまで、その職にあった。この間、彼は Tilbury に(オランダに対抗するために企画された新しい工業部門であった)レンガ・タイル工場を設立したカンパニーの経営者となったが、このカンパニーは彼が国教反対の文言を書いたかどで投獄されたために一七〇八年に破産した。その後、特に晩年に彼は時々商業投機に参加したけれども、彼の事業歴はこれで終っている。(Cole, *Ibid.* pp. 4–5, 23–24.)

(2) Cole, *ibid.*, p. 24.

(3) H. J. Eldridge and Leonard Frankland, *The Evolution of the Science of Book-keeping*, 2 nd rev. ed., London 1954, pp. 46–47; Arthur H. Woolf, *A Short History of Accountants and Accountancy*, London 1912, p. 222.
なお、簿記史の研究論文の中には、きわめて部分的ではあるが、『完全なるイギリス商人』(一八四一年のリプリント)を引用して、自己の主張を裏付けている論文がいくつかある。
Basil S. Yamey, "The Functional Development of Double Entry Bookkeeping," *The Accountant*, Nov. 2, p. 335; Yamey, "Scientific Bookkeeping and the Rise of Capitalism," *The Economic History Review*, Second Series, Vol. 1, Nos. 2 & 3, 1949, p. 104.

(4) Yamey, *ibid.*, p. 101.

二

デフォウの簿記論は、それが収められている『完全なイギリス商人』が若い商人のための心得と実務の手引として書かれていることからも推察できるように、つぎのように若い商人は徒弟期間の後半に主人から簿記の仕方を習得すべきである、と説くことからはじまっている。

「商人の帳簿は〔必要に応じて〕繰返し彼に時をうちつげる時計〔のごときもの〕である。それはあらゆる場合に彼がどのような進み方をしているか、この世において彼がどのような状態におかれているかを告知らせるものである。そこで彼は進むべきとき、もしくは踏止るべきときを知るであろう。そして、彼の規則正しい簿記と彼自身がその帳簿に充分に精通していることに、商売それ自体でないにしても、少くとも商売の気持よい進行は依存している。もしもそれらが帳簿に正しく転記され、そしてすべてのことが帳簿に注意深く記入されているのでなければ、つまり借主勘定が記録され、現金が常に〔その実際残高と帳簿残高とが一致して〕貸借平均し、貸〔主勘定〕がもれなく記載されているのでなければ、商人はあたかも舵なくして航海する船のごときものである。」（一四頁）したがって「商人は帳簿がなくては大きな事業はどれもやってゆくことができない。そして彼は徒弟期間中に自分が商売をやってゆくために必要なあらゆること――その中で簿記は絶体に必要である――に精通することにより事業の準備をしなければならない。」（一五頁）「徒弟は主人の簿記の方法を習得すべきである。その方法がよいものならば、それを見習ってもよいし、そうでなかったら、時節をまってよりよい方法を学んでもよい。」（一三頁）「商人は事業をはじめたとき、帳簿のつけ方によわってはならない。商人の徒弟奉公は、彼にとって、彼が自分の事業のために必要な

資格をあたえるであろうあらゆること、少くとも彼の主人が彼に教えることのできることを学んでおかなくてはならない学校であり、かつ当然そうあるべきである。」（一三―一四頁）

さて、右に引用したように、デフォウは、簿記は商人にとって指針の役割をはたすものであるから、若い商人は将来にそなえて徒弟時代に主人から簿記の仕方をならっておくべきであると説いた後、ふたたび元にかえって、簿記が商人繁栄のための不可欠の重要な手段であることをつぎのように説き明している。

「少くとも年に一度、財産（ストック）と損益の勘定を締切ることは常にイギリス商人の古きかつ称讃すべき慣習であった。そして、それは一般にクリスマスまたは新年になされた。その時彼等は常に自分達が後退したか前進したか、自分達の事業はこの世でどのような状態におかれているかを語ることができた。このよき慣習は今日では商人の間で相当多く失われているが、なおそうしている多くの人達がいる。そして彼等はそれを決算（casting up Shop）と呼んでいる。」（二六六頁）このように「決算は彼（商人）が後退したのかそれとも前進したのかを毎年知る方法である……から、彼はまた自分の帳簿を締切らねばならない……。さて、このことを実際に年に一度おこなうためには……、商人は入念に自分の帳簿をつけなければならない。さもないと、彼は自分が豊かになったのかどうかわからないであろう。正確に帳簿をつけることは商人繁栄の一つの重要な要素である。」（二六六―二六七頁）

ところで「三〇〇年昔の取引は今日のものとちがったものであった。……その当時世界でおこなわれていた商業はそのほとんどが個別的（personal）であった。」（三二―三三頁）遠くはなれた世界各地で海外貿易にたずさわる商人は一般に船荷と一諸にでかけてゆき、それを海外で売却し、売上金をその地の商品にかえ、それを自国に持帰った。海外へ持出しかつ売却した商品とそこから持帰った商品の金額を計算すれば、差引残高は当該航海の損益であ

った。……彼等は買い、売り、彼等は交換した商品をそれぞれ持帰り、信用を授受しない。したがって、勘定は必要でない。……信用をともなわない取引は簿記をちっとも必要としないのである。」（三三頁）このことは今日でも同じであって「卸売または小売のどちらでも、信用を授受せず、みずからすべて現金で取引している者は、帳簿をまったくつけないで商売をやってゆくことができ、彼は自分の財産(estate)を知りたいときには、店と現金をかぞえて、その金額がどれだけになるかを知ればよい。これが彼の全財産、純財産である。彼はだれからも債務を負わず、だれも彼から借りていないから、彼の財産はすべて店にあるのである。だが、全部現金で取引する商人はいまだ生れず、またそんな商人がかっていたとしても、みな死んでいるであろう。」（二六八頁）したがって、もしもある商人がやってきて、わたしは現金取引をし、信用の授受をしていないのですが、帳簿つける必要があるかと問われたならば、ただちに、あなたは帳簿なしに商売をやってゆく資格のある人である、だが、あなたは、信用を与えたあらゆる事項を記憶しておくことのできるほど商売がきわめて小規模な他の人達をのぞけば、帳簿なしに商売をやってゆくことのできる世界で唯一の人である、と答えるであろう、と。（三四頁）

周知のように、信用取引の結果たる売掛金と買掛金は帳簿によってしかその存在を確認しえない帳簿上の貸借である。つまり、売掛金と買掛金の場合には、帳簿がその存在を証明する唯一の証拠であり、この点、有形財産や貸借にあたり証書（または手形）が授受される他の債権・債務のように、あえて帳簿によらなくても、その存在が確認できるものと大変違うわけである。この間の事情をデフォウはさらにつぎのようにのべている。

「商人がこの世に所有するすべてのものはつぎの三つのうちに見出されるのである。すなわち、店にある商品、現金、債権〔債務〕の三つである。店は、数えあげるのに少し時間はかかるが、いつでも第一のものを示すであろ

う。現金箱と手形箱（ビル・ボックス）は必要に応じて第二のものを示すであろう。転記された元帳は第三のものを示すであろう。」（二六七頁）しかして、「彼が自分の商品を信用で売った人達の借の勘定」が記載されている「帳簿は」彼の生存中はもちろん、死んだ場合にも「債権を十分に証明するものとして証拠とされるであろう。」（三五頁）「したがって〔信用で〕売った商品は常は帳簿に記入されなければならない。」（三八頁）この場合「帳簿に記入することを省略したならば、彼はその時には買手のなすがままである。……もしも得意先が私心なく正直であればよいが、そうでなかったら、商品は失われる。……そして、もしも商人がたまたま死んだならば、それは回収しえないものとなる。」（三八頁）他方、信用で「受取った商品の記入は、さきにのべた売った商品の記入のように絶体に必要ではないが、それは多くの点で必要であり、なおより多くの点で彼にとって有用である。」（三九頁）

さて、以上考察してきたように、デフォウは簿記が商人にとって必要となった第一の契機を信用取引の導入に求め、そして売掛金と買掛金のような直接に把握できない無形財産の「記録による保全」に簿記の中心的機能をおいていた。もちろん、このことは現金や商品のような有形財産の「記録による保全」が不必要であったことを意味しない。有形財産といえども、その量が直接に把握できる限度をこえ、したがってまたその管理が一部使用人に委任されるようになると、それを記録して保全してゆく必要が生じてくる。デフォウもこの点を忘れず、つぎのようにのべている。「商人の帳簿は彼が常に自分の有形財産（solid stock）の真の推定〔店おろし〕をなしうる基礎である。……商人の帳簿は彼の使用人の忠実さにたいする統制手段（check）である。そして、それによって商人は盗みをはたらいて彼を破滅せんとした者逆の不正を防止する機会をしばしばもった」（三四―三五頁）と。だが、この主張は、あとで考察するように、彼が示した帳簿組織では部分的にしか実現していない。つまり、有形財産の記録と保全の

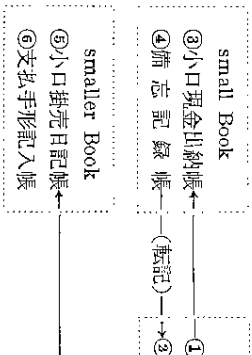
手段としてそこで実際に問題となっているのは、売掛金の回収と買掛金の支払いに直接関係し、得意先と仕入先の人名勘定の残高確定に必要な現金出納帳とその分身としての小口現金出納帳だけである。

三

デフォウが『完全なイギリス商人』を書いた当時にあっては、すでに考察したように「明らかに、規則正しくかつ正確な簿記は、商人に他人つまり借主と貸主との信用取引の証拠を保持することを可能にするから、非常に大切なものであった。」[1] そして、このような簡単な要求をみたすためには、簿記は「照合に便利なように借主と貸主の勘定に分解し、現金〔収支〕取引については一つの勘定に集合して取引を記録するだけで充分であった。これらの簡単な要求は複式簿記によって、また現金出納帳により補足される単式簿記のようなより複雑でない方法あるいは小企業の場合には取引記録のための簡単な備忘記録（simple memorial）によってもみたされた。」[2] つまり、あえて複式簿記によらなくても、単式簿記または単なる備忘記録でもほぼ完全に売掛金と買掛金の把握と保全という目的は充分にはたしえたのである。事実、デフォウが示している簿記形態も単式簿記（しかもそのもっともプリミティブな形態の簡易簿記）であった。[3]

そこで、以下、デフォウが示している商業簿記（デフォウは紙数の関係上、多数の労働者をやとっているガラス製造所、造船所、製塩所、炭坑、鉱山、製粉所のような手工業の簿記は省略し、もっぱら卸売商人と小売商人の簿記に説明範囲をかぎっている）の帳簿組織をまず一覧表の形に要約し、つぎにそこにつけた番号の順に各帳簿についての説明を彼から聞き、不充分なところは彼が示した実例を参照して補足することにしよう。

デフォウのしめした帳簿組織



(1)　現金出納帳（Cash-book or great Cash-book）

「小売商人の簿記の主要な部分は彼の貨幣について正確かつ上手に貸借平均した勘定をつけることである。」（三七頁）そして、つねに現金の帳簿残高と実際残高を照合する必要がある。「なぜなら、もし金庫箱〔の中味〕と現金出納帳〔の残高〕が一致しなければ、どこかに必ず誤りがあるからである。」（三七頁）

デフォウが示した実例（四六―六七頁）によると、現金出納帳は左右対照式であり、現金借方と呼ばれる左頁には、まず日付、つぎに売掛金を回収するごとに回収先と回収額、最後にその日の店頭現金売による収入額が記入され、現金貸方と呼ばれる右頁には、買掛金返済やその他の支払(たとえば、雑費の支払、小口現金係への支払委託、妻への家計費の支払など）をするごとに支払先と支払額が記入される。そして、左右頁の借方貸方合計額はそれぞれつぎの開きの左右頁の借方貸方へ繰越され、月末に一ヵ月の総収入から総支出を差引いて現金残高を算出し、それを次月第一日の現金借方へ繰越す手続がとられている。

(2) 信用取引日記帳（Day-book or Journal）

「現金の正確な記帳のつぎには、商人は信用で売買したあらゆる商品の正確な記帳に主としてたずさわる。」（三七頁）商品を掛売した時には常にその発送前に帳簿に記入し、帳簿から送状を作成すべきである。商品の発送または荷造りの用意ができたときに、その商品と照合しなければならない。帳簿記入なくして送状なしという前の手続は掛売商品の記帳を保証し、送状と商品を照合する後の手続は記帳の正確さの証明となる。（三八頁）他方、多くの者が送状が入った時にそれを綴込んで、掛買商品の記帳を省略していることを知っているが、そうすべきではない。それは合符（あいふだ）のない割符と同じである。商人は掛買商品を日記帳に記入し、つぎに送状を綴込んで保存すべきである。この場合、帳簿は商人にとっての記録であり、綴込みは帳簿の証票である。（三九―四〇頁）

「店頭で現金売された商品は〔この〕帳簿には売上として帳入されず」（四四頁）、デフォウが示した実例（九九―一〇五頁）によると、信用取引日記帳は上下連続式であり、まず日付、つぎに掛売買がおこなわれた順に、得意先または仕入先、品目、数量、単価、金額が記入される。

(3) 小口現金出納帳（Petty Cash-book）

「これは現金出納帳の従者であり、大帳簿〔現金出納帳〕で非常に小額の項目を計算するのをさけるために、すべての小口支払いを記入するものである。……〔改行〕もし商人が徒弟をもっているならば、この帳簿はしばしば彼にゆだねられ、彼の主人は一〇シリングまたは二〇シリング、時としてそれ以上または以下を彼にあたえ、郵便料、人夫賃のような僅少の費用を支払い、そして彼の勘定〔がのっている小口現金出納帳〕を彼の主人の好みに応じて三日おきまたは一週間に一回提出させる。」（四一頁）この場合、小口現金の実際残高と帳簿残高との「突合せは決して

省略されてはならない。……なぜなら、この小口現金の委託は若い商人にとって……正確な記帳をはやく経験させるから有益なものであるけれども、同時にまた一つの誘惑でもあるからである。」（四一頁）

デフォウが示した実例（七四―八九頁）によると、小口現金出納帳は左右対照式であり、小口現金借方と呼ばれる左頁には、まず日付、つぎに小口の費用支払のため委託された金額が記入され（もちろん、同時に現金出納帳の貸方にも記入がなされる）、小口現金貸方と呼ばれる右頁には、小口支払の発生順にその費目と金額が記入され、左右頁が一杯になったら、それぞれの合計額が次ぎの開きの左右頁へ繰越される。そして、必要に応じて主人より現金の補給がなされるが、一週間ごとに、小口支払額が支払委託額をこえた部分（貸方残）の補給がおこなわれ、貸借平均して締切られる。

(4)　備忘記録帳（Blotting-book or Minute-book）

「これは商人が大きな継続事業をいとなんでいる場合に必要なものである。仕事がいそがしいときには彼は〔信用取引〕日記帳に事柄の正式な記入をする時間も余裕もない。そこで、非常にいそがしいときにはここに記入し、仕事が終った夕方にこれが日記帳に正しく記入され、そしてそれから備忘記録帳の間に合せの記入は抹消される。」（四二頁）

(5)　小口掛売日記帳（small debt Day-book or petty Debt-book）

「多くの小口掛売をし、それをさけることのできない商人にたいし、わたくしはこの方法すなわち二〇シリングまた時として四〇シリング以下の小口売掛金を記入するより小さい帳簿をつけることを勧める。」（一〇六頁）たとえば、手袋、ハンカチ、ストッキングなど小額の商品が掛売された場合にはこの帳簿に記入され、それにたいし支

払がなされたときに受取済の印としてXXXをつける。（一〇六―一〇七頁）

デフォウが示した実例によると、小口掛売日記帳は上下連続式であり、まず日付、つぎに小口掛売の発生順に得意先、品目、（時として単価、数量）、金額が記入され、回収された場合には、さきにのべたように、XXXの印をつけて、未回収のものと区別する。

(6) 支払手形記入帳（Bill-book）

「彼〔商人〕にとってこの〔手形〕引受を帳簿に記入しておくことは絶体に必要である。それによって、彼に常にどんな手形が彼にたいし振出されているか、いつそれは満期になるかを知ることができる。」（一二〇頁）

デフォウが示した雛形（一二一頁）によると、支払手形記入帳には引受日、手形金額、振出人、満期日が記入される。

(7) 元帳（Ledger）―人名勘定(account of person or man's〈peoples〉account)

「元帳はもっとも大きな主要な帳簿であるばかりでなく、簿記の最後の重要な項目である。なぜなら、これまでのべた〔より大きな〕帳簿はすべてここに〔転記により〕集中されるからである。」（一二四頁）

デフォウが示した実例（一二八―一四一頁）によると、元帳には得意先・仕入先別に――ただし、たまたま得意先と仕入先が同一人の場合には、一つの勘定で処理するのがよい。（一四三頁）――左右対照式の人名勘定が設けられている。そして、そこへ現金出納帳と信用取引日記帳からつぎのような転記がおこなわれる。

(1) 売掛金回収高が回収日別に現金出納帳借方から各得意先勘定貸方（右頁）へ

(2) 買掛金支払高が支払日別に現金出納帳貸方から各仕入先勘定借方（左頁）へ

(3) 売掛金発生高が発生日別に信用取引日記帳から各得意先勘定借方（左頁）へ

(4) 買掛金発生高が発生日別に信用取引日記帳から各仕入先勘定貸方（右頁）へ

この場合、現金出納帳および信用取引日記帳には今日の元丁欄はないが、その代りにたとえばPo. 63. という転記印をつけ、元帳の六三頁へ転記したことをあらわす。他方、元帳には丁数欄があるから、そこに現金出納帳と信用取引日記帳の丁数を記入する。（一二四―一二七頁）

さて、右のようにして転記がなされると元帳の人名勘定は各得意先にたいする売掛金残高と仕入先からの買掛金残高を示し、定期的にそれぞれの残高の決済がおこなわれるまで締切られず、それらは未締切勘定または未済勘定（open account or account depending）といわれる。そして、決済がおこなわれたとき締切られ、新勘定が開かれるが、この場合全額決済がなされず、なお残高があれば、いわゆる直接繰越法によって旧勘定から新勘定へ残高が繰越される。（一四二―一四六頁）

(8) 元帳の控えまたはポケット元帳（Duplicate or Pocket Ledger）

「店や倉庫に火災がおこり、彼〔商人〕が自分の全商品のみならず、帳簿をも失ったので、彼は自分の債権を証明できなかったし、また借主が当然払うべきものを請求できなかった」（一四七頁）「悲しむべき災難」を知っているので、最後にわたくしは、手帳に元帳の写しをとっておき、それを家から離れた安全な場所に保管しておくことを――それはほとんどおこなわれていないけれども――大きな事業をいとなみ、かつ大きな信用を与えているすべての商人、特に他の地域よりもしばしば火災にみまわれるロンドンの商人にたいしすすめないわけにはゆかない。（一四六―一四七頁）

(1) Yamey, *ibid.*, p. 103.

(2) Yamey, *ibid.*, p. 105.

(3) この点、山下助教授のデフォウが示した「記帳の方法は、一応複式簿記の原則の上に立っていたのであるから、それは……かなりの進歩性を有するものとみてよいであろう」（山下幸夫「十八世紀初頭におけるイギリスの経営事情(一)――ダニエル・デフォウの《The Complete English Tradesman》を中心として」、中央大学商学論叢、第一巻第一号、一九六〇年七月、五八頁）という解釈には組しえない。たしかに、小口現金の小払係への支払委託や現金出納帳・元帳の残高繰越の場合に（しいていえば、現金出納帳から元帳への転記の場合にも）複式記入はなされている。しかし、これだけでは複式簿記の要件をそなえているとはいえない。「取引」の全部を複式記入でとらえてはじめて複式簿記といえるのであって、複式記入をしても、それが「取引」の一部にとどまっているかぎり、その簿記は単式簿記であるからである。事実、デフォウの示した簿記組織では複式簿記の不可欠の要件たる損益勘定が完全に抜けている。

四

前章での考察によって、デフォウが彼の『完全なイギリス商人』の中で解説していた簿記方法は単式簿記であったことがわかったが、それはまた当時のイギリス商業簿記の一般的実践形態を反映したものであった。「実際、大多数の企業は、十九世紀に入るまで、より複雑な複式簿記法の解説がテキストの紙面の大部分をふさいでいたにもかかわらず、記録の簡単な形式（それは便宜上「単式簿記」と呼んでよい）を使用したにちがいない。チャールズ・ハットンは一八一一年につぎのように書いている。すなわち『事業をするつもりでいるほとんどすべての人達はこの種の簿記〔単式簿記〕の課程を学ばねばならない。なぜならそれはほとんどすべての商店で使用されているからである』」(Charles Hutton, *A Complete treatise on practical arithmetic and book-keeping*, new ed., Hawick, 1811, p. 141.)

と。[1]」また、パトリック・ケリーは一八〇一年に単式簿記と複式簿記の両者を解説した著書（Patrick Kelly, *The Elements of Book-keeping both Single and Double Entry*, 1801.）の中で、単式簿記は主として小売業において使用され、複式簿記は卸売業で採用されている[2]、とのべている。

では、このように十八世紀のイギリス商業、特に小売業において複式簿記が採用されなかったわけはどこにあるのであろうか。

右の問いに充分に答えるにはさらに別個の研究をしなくてはならないが、おおよそつぎのように考えて間違いないであろう。すなわち、当時の商業は個人企業としていとなまれ、店（企業）と奥（家計）とは非分離の状態にあった――このことはデフォウが示した現金出納帳に妻への家計費の支払が貸記されていたことからもうかがえよう――から、そこには企業を資本勘定として計算的に独立させる「資本」の概念が成立する余地はなく、他方、個人企業の利益分配関係はきわめて単純であり、獲得された利益はすべて自動的に企業主のふところに入ったから、「利益」をあえて「資本」から計算的に分離独立させる必要はなかったのである。事業がうまくいっているかどうかを知り、将来への指針とするためには、一部は帳簿記録他の一部は直接計算することにより「財産」のおおよその増減状況をみれば充分であったのである。つまり、この時代には「資本」とその増分たる「利益」の確定にもっとも適した複式簿記を必要とする基盤がまだ形成されていなかったのである。もちろん、かかる基盤が欠けている個人企業にも複式簿記が導入されたことはあるが[3]、それが本来の機能を充分にはたすのは、企業の規模が個人資本の枠をこえて拡大し、「資本」の所有関係が複雑となり、「利益」の分配に利害の対立が生じてからである。したがって、われわれは、組合企業からはじまる所有と「支配」の分離（所有の分散化と支配の集中化）の過程が複式簿記を生成・展開

させる真の場を提供したと、考えなくてはならないであろう。

(1) Yamey, *ibid.*, p. 105.

(2) Eldridge and Frankland, *ibid.*, p. 52; Woolf, *ibid.*, p. 142.

(3) この点について、ヤーメイはつぎのようにのべている。「複式簿記は〔簿記の〕教師や会計専門家によって簿記の基準またはのぞましき制度として認められるようになり、そして彼等の感化力と仕事によって、より簡単な制度〔単式簿記〕が適当であった場合でさえも、複式簿記が使用されるようになった。」(Yamey, *ibid.*, p. 113.)